針葉樹会報

第 89 号
1999 年 10 月

戦後間もない頃の旧部室

目次

【特集】新部室落成
御礼まで　……　石原　脩　2
新部室建設顛末記　……　西牟田伸一　2
部室五十年（再掲載）　……　増山清太郎　4
戦争で部室を閉じたころ　……　山崎　擴　6
旧部室／新部室　……　伊藤　恙生　9
私の部室暮らし　……　横山　皖一　9
新部室の絵　……　中村　正司　11
部室居候時代　……　岡垣　治雄　12
旧部室の思い出　……　佐藤　周一　12
部室再建に思う　……　田形　祐樹　12
比叡山麓より　……　市川　陽一　13
走って十年　……　倉知　敬　14
那須に居を定める　……　原　博貞　17
天地ある限りいつ迄も　……　城山　邦紀　18
会務報告　……　20
編集後記

発行日　1999 年 10 月 25 日
発行者　針 葉 樹 会
印刷所　ヤマノ印刷㈱

針葉樹会報
第 89 号

編集人　佐薙　恭
〒240-0066
横浜市保土ヶ谷区釜台町 5-4-806
会報幹事
佐薙　恭、井草長雄、大谷公重

御礼まで

石原　脩（昭30）

新部室の建設に際して、次の四人の方々に別途御礼を申し上げます。

磯野計一様。昭和四一年に亡くなられた父君磯野計蔵先輩の霊位に、七〇年にわたってお世話になった御礼と今回の取り壊しのご報告を申し上げたところ、早速、現地の地図をご所望され、明治屋社長としてご繁忙の中を、新旧両部室をご視察いただいた由、現場にいたOBから報告を受けました。

福田　孟様。昭和二七年七月の涸沢夏合宿に先発した貴兄は、就寝中に天幕を破って飛び込んできた落石に大腿部を直撃されるアクシデントに見舞われました。これによる越年がなければ、三一年卒の数多いオーション会に所属していたはず。

しかし、当時からの家業であった福田製綿の代表者で頑張っておられるとのことで、安心もし、また、当時の状況が次々に脳裏をよぎった次第です。ご送金感謝いたします。

奥村一郎様。山岳部には属さなかった先輩ではありますが、故久保孝一郎OBの山仲間であり、久保さんの飯豊山遭難時も、また葬儀の折にも、針葉樹会員以上のお働きでありました。

さらに、この度は新部室へのご芳志を賜わり、誠に有難うございました。

市川陽一君。君が五〇万円募金したとの情報は、九九年年頭のビッグニュースでありました。

前年末からの約一ヶ月余で、ようやく一三〇万円の募金額が、年明け十日目で一挙に二〇〇万円の大台を超えたのは全く君のお陰でした。

かくして、一月二二日の針葉樹会新年会では、なにしろ勢いがついて、「六六人は少ない」「全員に声をかけよう」ということになり、三月末には一六〇名に達しました。

市川効果はこのように顕著でありましたが、総額で五〇〇万円を超えるとは夢にも思っていませんでした。皆さん有難うございました。

◇

新部室建設顛末記

部室再建幹事　西牟田　伸一（昭47）

部室建設については会報87号（本年1月発行）に「部室再建計画の経緯と現状」と題して書いたばかりではありますが、本稿では募金に係わる事、その他、その後に起こった事どもを書き記しておくことにいたします。

1．募金のこと

当初（昨年の11月の針葉樹会臨時評議員会の頃）は、総工費五〇〇万円のうち募金で賄えるのは半分の二五〇万円、残りの二五〇万円は遭難対策基金を取り崩すことで了解を得ていました。実際は予定を大きく上回り、遭難対策基金を取り崩したのは六〇万円余りという嬉しい結果となりました。（所要総額六四〇万円、募金額五八〇万円）

時系列的には

98年12月22日	66万円
98年12月29日	137万円
99年1月18日	267万円

99年2月1日　357万円
99年2月18日　450万円
99年3月5日　513万円
99年4月2日　554万円

となりました。この間、毎週二回、会計担当幹事田形君から入金状況が電子メールやファックスで幹事及び年代別責任者に報告されました。

金額が増える楽しみはありましたが、一方で気になったのは針葉樹会員全体に占める応募者の比率でした。必ずしも全会員の総意で実行に踏み切ったわけではなかったからです。結果としてはこの比率も85％（163人／191人）を超える事が出来ました。

また、如水会報にも針葉樹会員とは別の郵貯口座を紹介し、広く資金を募った結果、一三人の方から貴重な浄財を得ました。多くは学生時代の一時期、山岳部に籍を置いた、あるいは卒業後山岳部OBと山行を共にした、旧部室にそれぞれの愛着を持つ人達でした。

花見の宴の際、新部室脇に松を記念植樹した

また、4月3日に開催した花見の宴に出席なさった故太田可夫先生の遺児三兄妹や今回建設をお願いした古溝建設の監査役でボート部先輩の佐藤守さんもこの中に入っています。

1月22日の針葉樹会新年会以降、急速に募金が伸びました。これは新年会の席上で募金対策を話し合い、年代を大まかに三つの世代に分け、石井左右平前会長、高崎治郎副会長、私がそれぞれの世代の責任者となって募金活動をしました。各責任者が更に細かく担当を配分することにより、細かい対応が可能となって効果が上がったのだと思っています。

特に、高崎さんご担当の世代は富裕層が多いこともあるかと思いますが、高崎さんご自身の粘り強い活動によりかなりの成果をあげられましたことを報告しておきます。

2．総工費のこと

11月24日、大学にて大学当局（主計課長、施設課長、学生課長）と古溝建設、私で設計検討会を行いました。その席上、古溝建設が提出した設計図に当局側からクレームがつきました。

それは基礎の構造の事です。当局の言い分は「大学が寄附を受け管理責任を負う以上、構造はしっかりしたものが必要である。軽度の地震で不等沈下を起こし、建て替えが必要になるのは困る。柱ごとに独立した基礎を持つ構造ではなく、基礎同士が継続した構造（布基礎）にして欲しい」との事。

これを受け入れることとし、六〇万円が加算されました。

なにしろ、募金の成果が明らかになる前のことですから、学生から出る要望も削るほうが多くなりました。その一つにクライミングウォールがあります。

学生は装備庫側の外壁をフリークライム用のボードを取りつけた壁にして欲しいと言ってきました。試算してみた結果、何十万かかることが分かり、あきらめさせましたが、その理由の一つに使ったのが、「この秋、如水会から小平に建設寄附される百二十五周年記念館にこのウォールが設置される」とのニュースでした。

この件は如水会の記念館建設担当理事がたまたま私の同期生であったことから分かった事ですが、一般公開も予定しているため安全対策上ある程度の経験者を指導員として雇う予定とのこと。実現すれば山岳部員の獲得、現部員の収入源にもなるかと思っています。

また、最後になって私を悩ませたのは旧部室の取り壊し費用です。

11月末の会合では新部室を建設する側で旧部室取り壊し費用も負担する事を認めさせられました。いくらかかるものかも全く不明でしたが、「今年度、学内には旧可さん邸をはじめいくつかの取り壊し案件があり、それらとまとめて業者に発注する。その分担金を支払ってもらう」との事であったので、個別発注よりは安く済むと思っておりました。

実際にはタイミングが合わず、可さん邸の取り壊しが済んで二週間ぐらいクレーン等の重機類が可さん邸跡地に放置されていました。実際の取り壊しは4月3日（花見の宴当日）に行われましたが、朝10時に私が現場を見たときには全てが叩きつぶされ、残材をトラックに積み込む作業中でした。

結局大学の会計を全く通さず、個別発注のかたちで税込み四〇万円かかってしまいました。業者によれば実際の取り壊しや輸送のコストよりも廃棄物の処分場の確保にカネがかかるとのことでした。

3．中村正司画伯の絵

部室に入るとひときわ目を引くのが「山の影武者」と題する油彩画です。

これは中村正司さん（昭28）が寄贈されたもので、新しい部室の壁に良くマッチしていると思います。上原さんを通じて最初に寄贈の申し出があった時、学生のほうから「今後増えるかもしれない家具の邪魔になる」等の拒否発言があり、また画伯からは所有権、安全に保存する義務等の法律論が持ち出されたりいたしましたが、現在は落ち着くところに落ち着いたようです。

4．部室の利用について

OBが「国立の部室に行ってのんびり本でも読みたいな、トレーニングをしたいな、同期会でも開こうか」と思った時は、現役に電話してみて下さい。

3桁の数字を教えてくれますから、それを覚えて部室に行けば簡単にドアをあける事が出来ます。針葉樹会員はもっと国立に行く習慣を持ちましょう。

現在の現役部員は以下の4名となっています。

宗像　充	電話	0902-54-13048
久田英一郎		042-341-1326
田中　真之		042-573-8270
山田　秀明		0904-929-2613

部室五十年――建設経過を中心に

（再掲載）

増山　清太郎（昭8）

話は第一次世界大戦に始まる。当時アジア大陸は列強により植民地化しつつあり、日本は出遅れていた。そこで欧州の騒乱に乗じて対支強硬策を執って、二十一ケ条条約を押し付け、日英同盟に名を借りてドイツの拠点青島を攻略して、捕虜を内地に送ったことは、歴史教科書の教える通りである。ところが捕虜といっても職業軍人は少なかったし、日本人は心情的にはドイツ人に同情する傾向もあったので、これら捕虜を利用もしたし、優遇もした。今日のブリジストンタイヤ、ローマイヤ等の企業は、彼等の技術によって基礎が置かれたものである。ある捕虜の一人は組立家屋を作って、金に換えていたが、その一戸を磯野計蔵君の厳父長蔵氏が買い取って、自邸の倉庫に入れておいた。

一橋大学は、関東大震災（一九二三年）によって校舎を失い、紆余曲折をへて、一九三〇年九月に国立に移ったところ、移転直前に

磯野君から、件の組立家屋に建設費百円を添えて部室として寄附したいという申し出があったので、一同大喜びをしたが、現物を見ると、日本語でいえば四阿のようなもので、部室としては使えないものであることが判って、がっかりしてしまった。

建築費の百円は返却の必要はないとの長蔵氏のご意向だったので、その使途を相談しているうちに、話はエスカレートして、国立の雑木林の中に山小屋風の部室を作ろうということになって、資金計画まで出来てしまった。

この動きに対しては、懐疑論が生まれた。たとえば中島嘉一郎君は、自身慎重論を唱えるとともに、部員中の反対論に耳を籍さなければいけない、と説いた。しかし実際に国立に移ってみると、あてがわれた部室は専門部(現東校舎)の隅の廃屋に近いものの一室で、しかも数部の共同使用という始末で、全く部室の用をなさなかったので、懐疑論は霧散して三一年春の竣工を目指して、建設に邁進することになった。が、一方ではこの年は山行自体も活発に行われた事実は見逃さるべきでない。

資本計画は次の通りである。即ち、建設資金八百円、予備費五拾円とし、調達面は、

本科部員拠出　一六〇円
予科部員拠出　三〇円
部費補助　一〇〇円
『針葉樹』五号益金　二〇〇円
針葉樹会寄附　二〇〇円
浦松氏寄附　六〇円
磯野氏寄附　一〇〇円

となっている。以下項目別に説明すると、

本科部員拠出というのは、当時の部員二一名が、五円ずつ出したものである。予科もこれに準ずる。

部費補助は、部の経費を節約したものであるが、同年にはごく大型の天幕も購入しているので、せいぜい百円しか捻出できなかったのであろう。

針葉樹五号は、その内容からして二百円の利益は挙げ得るものと考えたのである。結果は予算通りになった。

針葉樹会寄附というのは、会に資金があった訳ではなく、会員から取立てたものであるが、当時の会員は十数名、歴史に残る大不況の最中で、給料は安くて、特別の人をのぞけば平均月百円くらいだったろう。新婚早々の人、結婚準備中の人、背広を揃えなければならない人達にとってこの金額は少ないものではなかった筈である。針葉樹五号の利益といっても、実際にはかなりの部分が針葉樹会員の背負込みになっていたに違いないし、針葉樹会自体の運営費もかかるし、このような状況の中で二百円の寄附を頼んだ私達は、随分図々しかった訳である。松木謙三氏が取り纏めを引き受けたが、大分苦心しておられるようであった。総括責任者は高瀬進三君であった。

浦松氏寄附というのは、当時氏は一橋山岳部への接近を図っていたので、寄附を得たのである。

資金が集まりかけると、大学との折衝が行われた。建設そのことには異議は生じなかったが、維持管理については、木村部長と黒川事務官は、「諸君は使用権を確保すれば、所有権は持たないまでも差支えあるまい。大学に寄附すれば何かにつけて好都合であろう。将来の修繕費も出して貰えるだろう」との意見、佐々木収入官(後、事務官)は、「大学は機構上、一つの役所であって、その施設は一冊の本、一本の立木に至るまで国有財産である。部室を大学に寄附するということは、法的には国に寄附することになる。従って政府が除却を命じてきた場合、大学当局は阻止する力は持たない。やはり諸君自身が所有する方がよい」との意見であった。私達は佐々木氏に従った。この見解が妥当なものであったことは後に知られる。

かくて三一年四月二一日に棟上を行い、五月一〇日の大学移転祭までに竣工させようと

したが、工事はなかなか進まない。原因をさぐってみたら、大学の推薦によって契約した岡本組というのが信用に乏しく、下請への支払いが滞っていることが判った。彼等をおどしたりすかしたりして、五月下旬には完成に漕ぎつけた。

設計者の粟谷氏については、全く記憶がない。

五月三一日（日）先輩・夫人・現役が集って落成披露を行う。若葉に包まれた部室で電灯のつくまで愉快に談笑した。

かくて私達の拠り所が出来た。私の卒業する三三年三月までは、維持管理上特別の問題は起こらなかったが、その後、大学当局にとって甚だ迷惑な存在になったと聞いている。

部室建設に当たっては、大学の了解は得られたが、正式の許可を受けた訳ではないので、大学にとってみれば、「何物でもない物」にすぎず、図面にも載ってなかった。神田の狭い所にいた時には、十数万坪の敷地の隅に小さな山小屋があっても、よもや邪魔になるとは思わなかったのであろうが、実際に土地を利用しようとすると、何かにつけて部室が障害になる。国有財産ではないから政府が勝手に処分する訳にもいかぬ。官舎の設計を変更をしなければならなかったり、会計検査官の目をごまかすためには、非常な苦心をしたともいう。

戦後になって大学の態度も変わってきて、「何物か」に昇格した由である。それには針葉樹会員で大学に職を奉ずる諸君のお骨折りがあったのであろう。十年ほど前に勝田有恒君から委しい経緯を伺ったが、なにせ役人と私達では考え方がまるで違うので、失礼ながら話の筋がよく判らなかった。結論は部室は大学の所属施設の附加物として認知されたが、その法的基盤は極めて弱く、全面改築は到底認められない。修理もやり方如何によっては除却の理由になる。従って根継ぎをしたり、つっかい棒を立てたり、こっそり屋根を葺き直したりして、外観を変えずに維持を図らなければならない、ということであった。

最近のことは知らない。

以上は、磯野長蔵氏に関する部分は私の記憶によるが、その他は確実な資料に基づく表面的な記述である。読者の主たる関心は、その利用状況、雰囲気、山岳部の発展への寄与等にあると信ずるが、その辺は人を代えて書いていただきたいと思う。

追記

丸茂平造君の語るところによると、山梨県で、ドイツ捕虜の技術指導によってブドウ酒を作った事業があり、今日のサントリー㈱ワイン部門になっている、とのことである。

（編集部注＝本稿は一九八一年一二月発行の針葉樹60号に掲載されたものですが、旧部室創建当時の事情を知らない会員も多くなっているので改めて掲載しました）

戦争で部室を閉じたころ

山崎　擴（昭23）

太平洋戦争の敗戦も決定的となっていた昭和20年6月の末、私は一人、部室の荷物――ザイルやらテント、寝袋、ピッケル、アイゼン、スキー、その他もろもろの小道具、それから図書類、つまり椅子やテーブル、ストーブを除いたすべての財産を屋根裏部屋に担ぎ上げていた。

前年の春に徴兵検査を受けながら、志願もせず、不思議なことに入営通知も来なかった私も、天網恢恢ついに召集礼状を頂戴し6月30日新宿駅集合ということとなった。そのころまでに東京はほとんど焼け野原となっていたし、米軍上陸も当然予想されていたので、

入隊したのがなんと松本で、毎日常念岳を眺めながら練兵場をはいまわる羽目となったがこれは後の話。

私が予科に入学したのは昭和17年であった。同期で山岳部に入ったのは、石井、中村（讃治）、関、大河原、倉田など、そのほか出たり入ったりした人も数人、確か俳優になった久米明もその一人であったと記憶している。部としては立山や奥秩父の遭難直後であったので、この大量入部は嬉しがられたようである。予科の部室は賑やかであった。

ところが、学校にも戦時体制が押し寄せて勤労動員やら、卒業繰上げやら次第に厳しい状況になり、17年春の鹿島槍、夏の涸沢、暮れの乗鞍スキー合宿が大きな組織的合宿の最後となってしまった。18年には例の学徒出陣もあり学部の先輩部員はほとんどいなくなった。さらに19年にかけても同期の連中まで続々と海軍、陸軍へ志願してしまい、部員は減る一方となった。

山行といっては、18年10月と12月の槍ヶ岳、19年3月の奥又白池から前穂、5月の鹿島槍などが精一杯のところであり、参加メンバーも私等と一級下の田中、笠原君等せいぜい5、6人で、食料や燃料を集めるのが先決であったから先輩のところを回ってお願いをして歩いた。当時、物産におられた堀岡さんには格別お世話になったし、軍隊にまで押しかけてガソリンを四合瓶にもらってくるようなことまでやって、ようやく山に行けた。その後はそれも厳しくなり、旅行も制限され、個人山行も不可能となった。

19年3月には小平校舎が陸軍に接収され、寮にいた私は追い出されて、専門部の校舎を改造した臨時の寮に収容され、国立の部室は近くなったものの人のいない部室ではあまり訪ねることもなくなった。

しかし19年10月には、ともかく自然に学部の学生となり、寮も出なければならなくなると頼りは部室だけとなった。学部に進んだとはいえ、学生がほとんどいなくなってしまったので、講義なども無く（これは私が出なかったのかもしれない）、ゼミにも入ってみたものの、暖房の無い小部屋で高島善哉先生の鼻先の水っ洟がいつ落ちるか心配で勉強どころではなく、1、2回でやめてしまった。翌年になってのことだったと思うが、学内で山田欽一先生にバッタリ会ったら「君、まだいたの」とのたもうたものである。それほど学生は珍しくなっていた。

20年の正月が明けて、久しぶりに登校してみると、驚いたことに兼松講堂と学生食堂の椅子や机が野外に積まれていて、中はなんと中島飛行機の工作機械が一杯に占領しており轟々と唸りをたてていた。武蔵野辺りの工場はサイパンからのB29の1屯爆弾にやられ、急遽正月休みに引っ越したものらしい。私等はたちまちその工場へ動員されてしまった。初めのうちは、なんとか真面目に付き合っていたものの、先方でもあまり役に立たないと判って、相手にされなくなった。しかし、員数合わせもあるらしく、首にもしないという状態が長く続いた。勤務は昼夜12時間交替ということになってはいたが、そういう状態だから朝ちょっと出てすぐ部室に戻り、昼ごろまた顔をだすと、当時は貴重品であった豆入りの大きな握り飯をもらって、また部室に帰るというのが生活のパターンになってしまった。

そんなことで、すっかり部室に居着いてしまい布団や炬燵を持ち込んで定住する構えであった。米、味噌は家から持参したものの副食はあまり無く、タンポポやアザミの葉を摘んだりした。動物性の食べ物が欲しく、釘を曲げて針を作り、図書館の前の池にほおりこんだらすぐに緋鯉が掛かってきた。鯉こくにしたが痩せていて出汁にもならなかったので

あとの鯉は殺戮を免れた。中村が上原専録先生のところから借りてきた、ポータブル蓄音機とシャンソンのレコードを竹針を削って、灯火管制の薄暗い電灯のもとで繰り返し繰り返し聴いたのも、このころの密かな楽しみであった。

この頃には、連絡のつく部員は大河原と中村、それに私の3人で、あとは兵隊か山へ登らない山岳部には用のない人達であった。その大河原も、肩に障害があって徴兵は免除になっていたが、教育召集を受けて栄養失調になり帰宅後も下痢が止まらず、衰弱死した。20年3月ごろであった。中村が部室居住の常連であったが、18年夏の動員先で赤痢になったのを利用して、怪しげな診断書を手に入れては徴兵検査を度々延期し、憲兵隊の目を恐れていたのと、父の為治先生（予科教授）が本土決戦をのがれようと乗鞍に疎開したので、春になると開墾のためにそちらへいってしまった。

こうして、4月ごろからは私一人となり、お先真っ暗ではあるものの、それなりに気楽な日々を送っていたのである。ただこのころには空襲が盛んで、よくサイレンが鳴った。そうなると可さんが学校の警備にいってしまい、女子供だけになるので、頼まれもしないのに用心棒気取りで、可さんの家にいった。子供さん達は上が中学、下は小学一年で食糧難時代に大変であったろう。一度夕食のところにいたら、天秤秤で一人一人計って御飯が配られていた。国立辺りは戦災は受けなかったのだが、部室は一度艦載機の機関砲の流れ弾が当たり、東側の屋根下から西側の羽目を貫いて、穴が明いていたのはあまり知られていないことであろう。その時、たまたま中村が屋根裏で寝ていた。

6月の末に私一人で部室を閉めた時の状況はこんな風であった。荷物の収納を終えると有合わせの板で屋根裏を塞ぎ、aus bieder trinken と小さい落書きを書いて、がらんとした部屋を後にした。鍵は可さんの奥さんにお願いした。雑木林を抜けるときはからだが空っぽになったような気分で歩いた。

私の復員は9月になってしまったので、部室を再開した時の様子は見ていないのだが、空家となった部室は食堂部のコックの宿舎になったということで、目茶目茶に荒らされてしまったようである。荷物もほとんど持ち出され、消滅した。残念なことであったが、防ぎようが無かった。収容されたのは部室の向かいに住んでいた学生主事の太刀川辺りの指し金ではなかったか。よく電気がついていると怒鳴られたものである。なくなった物のなかで私が一番悔しいのは、歴代の連絡ノートである。おそらく部室が出来たころからの習慣であったと思われるが、大先輩たちのユーモラスなやりとりが記録されていて、何とも楽しい読み物になっていた。おおかた焚付けにでもされてしまったのであろうが、現存していれば大変な文化財であったろう。

あちこちと脈絡もなく、書き綴ったので読みづらいと思うが、敗戦直前あたりのことはもう私ぐらいしか判らないので、石井からもいわれて、すこし長たらしく書いた。ただ記憶だけが頼りなので間違いも多いかと思う。ご寛恕を願いたい。

◇

旧部室／新部室

伊藤　恙生（昭和23）

昭和21年、秋元に誘はれて山岳部に入った。部室に行ったら田中一雄や笠原がゐて部費2円50銭をとられた。部室の奥（東側）は倉庫で、友田先輩のピッケル、シュラフをはじめザイル、テント等があった。その手前（西側）は書棚で、森脇先輩らが関西の学校の遭難救助に協力したことへの礼状が入っていたり、「針葉樹」や他校の山行資料はじめ部誌が入っており、倉庫・書棚の上部は中二階でそこに伯耆さんが寝泊りしてゐたと記憶してゐる。北側の壁には秩父で遭難した先輩の写真が掲げてあった。ここで月見の宴をやったのだが、酒は無論でたんだらうが確かな記憶はなく、ただ先輩方（増山さんが来て下さった）へ供するため、谷保の農家へさつま芋の買出しに行ったことだけ覚えてゐる。

当時の部室は何となく薄汚れて暗い感じだったが、それから50年経ってピカピカの新部室になり部員も二桁にはなっていないようだが、何人かゐて有難いと思う。

私の現役の頃は食料難時代で副食は鯨のベーコン・じゃが芋・玉葱、主食は米と大麦。その大麦を夏の奥又白で降り篭められて濡らし、腐ると大変なので文字通りの麦飯を食べたこともあった。乗車券（キップ）も前夜から並ばねば買へなかったこともあり、夏の穂高・冬のスキー合宿に行ければ上乗だった。それやこれやで山行が少なかったことが幸ひしてか事故がおきなかったことは本当に有難いことだった。

新部室の披露には石学長も顔を出してくれたんだから、無許可の不法建築だった旧部室から正式に認知されたわけで嬉しさも自乗になった気がする。

この新部室を新たな出発点として山岳部が今後益々発展してゆくことを冀ひ拙稿を終ります。

◇

私の部室暮らし

横山　皖一（昭27）

住んでいたのは昭和24～25年頃で、50年も前のことである。私は明治学院から昭和23年の学部入学で、入部してすぐ5月山中君（学1）の谷川・マチガ沢でのブロックによる遭難事故があった。その頃の部室と環境を思い出して見よう。

ライフライン（電気、水道、ガス、下水、電話）の中で部室で使えるのは電気だけであった。水道は可さんの家の玄関から塀に沿って曲がった舗装道路の右端にむき出しの水道管が1メートルぐらい立ち上がって、下は水たまりになっていた。もちろん下水道はないからトイレは現在も残っている大学の大きなトイレを利用するのだが、山小屋から4、5分はかかるので森の肥料にすることが多かった。

電気は先輩が工作してくれたのか、メーター無しで直結されていたので電熱器が炊事用具であり暖房用具で、無料で使うことが出

来たのは有り難かった。その時住んでいたのは横山、鹿俣で横山は2年くらい常住、その後は時々泊まっていた。

そのころの東京は住宅難で、寮に入るのは難しく、柔道場、剣道場、各運動部の部室にも学生が住み着いていた。周りは松、欅、楢に雑木を加えた森で、近くで人の住んでいたのは可さん家族と同居の事務系の人々、通りを隔てた学長官舎には増田先生、他事務の人々と山岳部先輩の関恒義特研生もこの2階に住んでいた。

当時の太田先生ご一家と同居の女性たち

この頃は交通事情も悪く食料難の時代だから山に行くのはなかなか難しく、昭和19年に初めて一ノ倉に行ったときは薩摩守（ただのり）だった。

山へ行くときより帰りの荷物が大きく重く、主に米を買ってきたが米が買えずにキスリングにいっぱい木炭を買って帰ったこともあった。こんな時代なので新入部員は毎年2、3人でみんなアルバイトで忙しいので実働部員が10人居れば良いほうであった。

25年の夏合宿は小泉がリーダーで南へ、横山と渋谷で奥又に入ったが雨続きで何処も登れなかった。12月は蔵王スキー合宿、山形高校のコーボルトヒュッテをかりたが私たち10人だけなのでラッセルに苦労した。

25年は北岳、農鳥合宿、今は廃道になった赤薙沢コース、広河原で煙草一箱とイワナ20匹の交換、バットレスには二日挑戦した。西山温泉からの馬が引くトロッコもなつかしい思い出である。12月の五竜は戦後初めての冬山で、馴れないことからいろいろの苦労をした。

可さんの子供たちも長女の女子大生アーちゃん以外はまだ小さかった。よく遊びに来ていた尭ちゃんも窓から中を覗くことは出来なかった。先生の庭の片隅に横長のイロリが切ってあり鉄製の横長の湯釜が掛かっていた。このイロリでサンマを焼いたりしたものだ。この湯釜は私の卒業後にこそ泥に持って行かれたと聞いている。可さん宅で碁を教えてもらったり（初めは九子）、部屋で将棋を打ったり（互い先）しているうちに毎日のように先生の処におじゃまをするようになった。関先輩と徹夜で将棋を指したのもこの頃である。

「これは食えるキノコだぞ」翌日、

「おい、元気か、本では調べたのだが」

「椎茸菌を貰ったので木を頼むよ」

櫟（くぬぎ）を2本伐って寝かしてから菌を植えたこと。これは2年くらい後に生えるのでゴチになった学生も多いだろう。また、蜂の子（土の中の巣を燻して取り出す）をゴチになった学生もいるだろう。

秋には谷保天のお祭りがあり、小屋掛けの田舎芝居を見に行ったこともあった。谷保天の後ろには梨畑が広がり先生のお供で梨を買いに行ったが、ただで大きな長十郎をいくつも食べたことだけを覚えている。このような太田先生べったりの生活で一日一回は必ずおじゃまをし、「じゃ」「じゃ」と言いながらおいしいお茶を催促したのもなつかしい思い出である。

国立の駅を降りて右側にエピキュールという喫茶店があった。ゼミの後で先生を囲んで

よくコーヒーを飲んだ。その頃は共産党にあらざれば学生にあらずという時代だったから山田雄三先生の下で理論経済学を勉強していた私には論戦を戦わすことが多かった。この頃は衣類なども不自由していたので教室に和服で行くこともあり、草履、下駄も大目に見られていた。

富士見通りに間口一間位の小さな食料品店があり、私たちは毎日安くて栄養のある納豆を買っていたので、馴れてくると黙って五円出すと納豆を一つ渡してくれるようになった。私たちはこの老婆を納豆婆と呼んでいたが、ある時先生に「何だお前たちが納豆学生なのだ」と言われてしまった。

なお先生とは26年5月に真名井沢を登り、その時の話は針葉樹会報復刊第20号に「足が笑った話」として報告してあるので関心のある方はご一読ください。

◇

新部室の絵

中村　正司（昭28）

一　「山の影武者」

古い部室を回顧する前に、新部室の壁に掛かっている私の作品『山の影武者』（80号）について触れて置きたい。きっと何年もしない内に「誰が画いたものか」解らなくなるだろうからである。

一九九六年度都展に出品、奨励賞を受賞した記念の作品である。山の道具も一部横山皖一氏から借りて画いたが何とも骨董の類、背景は一の倉。上原利夫君がこの絵を知っていて部室完成とともに会からの要請となった。この絵は同期と前後の山仲間から激励されながら出来上がったもので「良い場所を得た」と祝福されたが、さて実感は如何？　ご高評を頂きたい。

二　旧部室改修の時代

私が入部した昭和22年には雨もりや土台腐りが激しく、窓ガラスも板で補強してあったが、当時山に入っても殆どの山小舎が潰れていたもので、別に驚かなかった。戦前からのアルピニストであった石井さん他、諸先輩が卒業してみると、残された部員は等しく戦後のワラジ、地下足袋育ちで、みじめ一色。皆で顔を見合わせながら我々世代に出来ることは何か？　雨もりを受けるバケツの音を聞きながら鳩首考えたものだ。

「部室を修繕して、自分では買えない登山具を多少でも備えること」「それには先輩から寄附を募ろう」ということになり、身近な先輩の応援もあって、全員分担して寄附のお願いに回った。お蔭で部室も修繕したが、あれから四十五年間持ち堪えたのだから感無量である。

ところで念願叶ったお礼に「部員拡大」で先輩に応えようということになり、オリエンテーションなど通して運動したところ大量の新入部員を迎え、夏山合宿も30人に迫る盛況を見るようになったことは幸運の極みである。

ところで年を重ねるにつれて、地下足袋群の中にもアルピニストが入部する時代が到来した。顧みるにヒマラヤ登山も登頂する先鋭隊員を助ける多数の隊員が必要なように、山岳部もワラジで育った部員が底辺にいてこそ花も咲こうというもの、近来分化激しい時代とはいえ、山岳部は先鋭アルピニストに限っ

た部と化したことに、近づき難いショックを感じていた次第である。

然し聞くところによると、新部室と共に往年の裾野の広い体制を目指すとの由、大変喜ばしい。私も針葉樹会に顔を出すことが出来そうで嬉しい。

部室居候時代

岡垣　治雄（昭33）

一年生の昭和29年7月、それまでの立川市内の下宿から部室に居候しました。先住者は吉田義則さん。いずれ国立国分寺方面へ転居するつもりでしたが、夏合宿の費用を捻出するため、早急に下宿代を浮かす必要が生じたのです。夏休み期間中のつもりでしたが、居心地よいので結局10月頃まで厄介になりました。

寝る場所は屋根裏ですから、上り下りには一寸技術を要しましたが、日常生活には不便もなく、おまけに只ですからまずは快適な毎日が送れ、転居の際Y中さん愛用のタンスまでいただいたのです。

その間の出来事。吉田さんの真似をして毎日納豆を食べましたが、それも塩のみという徹底した節約ぶりでした。浮かせたお金で馬頭刈尾根に連れていっていただき、岩場のトレーニング、初めてアップザイレンを経験しました。佐薙さんにいただいた学生服を鹿俣さんにお貸しし、見事入社試験に合格されましたことなど昨日のように思い出されます。

山陰の片田舎に育った小生にとって、数ヶ月の部室暮らしは人様との御縁に恵まれ、懐かしさいっぱい、感謝の念いっぱいの思い出です。新しい部室ではこんな体験などできないでしょうが、単なるクラブ活動の拠点だけではなく、何かプラスアルファーが得られるよう運営されることを期待します。

旧部室の思い出

佐藤　周一（昭54年）

お世辞にも快適とは云えない「山小屋」でしたが今となればかけがえのない思い出が宝石のように詰められた「空間」でした。

新人歓迎コンパの「剣菱」の洗礼に始まり、青臭い議論の日々、学食前から引っ張ってきた立て看の炎が怪しく照らす松の木ハング…。本棚の蔵書や装備庫の登攀用具が眩しく見えたのも束の間、合宿を重ねる毎にマンネリ化する自分に溜息をつき、事故が続き出すと一層無力さとともに部室のくたびれ具合を感じていました。

それでも探検部の関野氏と出会い、途中退部したN氏、W氏、S氏ら諸兄との穏やかな語らいの記憶は生涯残ることでしょう。金欠病のために彼女との秘めやかな語らいの時を過ごした思い出もまた、（あくまでも語らいのひとときです、念の為）新部室が再び新たな思い出創造器となることを念じつつ駄文をつらねました。

部室再建に思う

田形　祐樹（平6）

私が現役だった、今から数年前から学生や

ＯＢが集まると、どこからともなく「部室を再建しよう！」という声があがっていたが、それは酒の肴にしかなっておらず、誰も？本気にしていなかった。したがって、今回の話があがった時に、私が部室再建基金の会計幹事になったけれども「どれだけ募金してくれるのかなあ。全然足りないのでは……」と心配していた。しかし、この件に関して、西牟田さんが先頭に立って活動してくれたおかげで、とうとう本当に部室が建ってしまいました。

そして、この部室再建は西牟田さんの活動なしにはありえなかった。まず西牟田さんに「ありがとうございます。ご苦労様でした」と言いたい。もちろん西牟田さんだけでなく、募金していただいたすべての方々、それと本件にたずさわった佐藤活朗代表幹事、古田茂総務幹事、井草長雄会報幹事にも感謝したい。

次は、この部室を活かして、この針葉樹会のパワーを海外遠征につなげられないだろうか、と考えている昨今である。

◇

比叡山麓より

市川　陽一（昭34）

京都の比叡山の麓に居を構えて二十一年半となり、即ち今までの人生の殆ど三分の一は、京都に住んだことになります。未だに関西弁特に女性的トーンの京都弁には、全く馴染めません。生まれ故郷の横浜ッ子の歯切れの良い口調に柔らかい関西弁を混ぜた独特の言い方で、日常過ごしています。

兎に角、振り返ってみますと、山に縁のある、今までの人生でありました。実際に山に登り続けたかどうかは別にして。生まれた横浜の家では、縁側より大山と丹沢山塊とその中間に屹立して、富士山を毎日眺めていました。従って、丹沢には足繁く通いました。一九六三年（ＪＦＫが暗殺された年です）New York 在の折り、Princeton 大学に居られた一年先輩の加地幸雄氏に誘われて、Catskill Mountain に登るチャンスもありました。翌年帰日の帰途、カナダの Banff National Park に立ち寄り Canadian Rocky を写真に収めたのを山岳部の年末の例会で披露するチャンスも与えていただきました。

その後、大阪の池田に住んで五年、そこには低い山ですが、五月山、それに連なって北摂の山並みですが、その奥に宗教色豊かな妙見山あり、山の雰囲気の満ちた処でした。また神戸の六甲も比較的近かったです。そして現在は、比叡山のまさに麓に住み、今の老骨で二時間で登れます。そしてその奥は有名な京都の北山連峰です。

然し、幸か不幸か未だに“現役”として使われており、一カ月ないし二カ月毎にはColorado 州にあるオフィスに出張で出かけておりますが、そこは Continental Divide を形成している、まさに Rocky 山脈の中心部で、四〇〇〇ｍを超える山々が南北に連なり豪勢な景観を見せてくれています。また格好の Rock-Climbing の場所も数多くあるようです。

以上の如く、山には恵まれましたが、“実際は”登っていないのです。言い訳めきますが、余りに仕事に熱中し過ぎたのです。言い換えますと、「会社人間」に徹底して参りました。学生時代でさえ、合宿の前には約一カ月前より Training を積んでいました。小平の分室で、昼飯の直後に津田塾のぐるりをランニングしたまたはさせられたのが懐かしく

思い出されます。

これは四〇年以上も前の話ですので、これからこの年で山に登ろうとすると、恐らく半年前より懸命に Training を積まぬと無理と思って居ります。あと数年は現役として社業に励むつもりですので、その後一段落した後、その時になってどういう気分になるかわかりませんが、training を積んで、山に復帰したいと考えています。

走って十年

倉知　敬（昭38）

《事の始まり》

四十歳になろうとする頃、一念発起して昔続けていた冬山登山を再開し、年末年始の休暇を利用した正月山行を十年休まず続けた。それは、三千米級の雪山を三、四日かけて、主に雪稜伝いに登るというものであったが、当然重装備をかつぎ、雪中露営をし、深いラッセルや時には岩壁登攀も伴なうこともあり、若い時の経験はあるものの体力・気力が続くものか不安ではあったが、まだ残っていたエネルギーがあって何とかこなすことができた。

十年経って五十代に突入しようとする頃になっても尚、冬の山の刺激的な魅力は興味のつきぬものだったので、しばらく続けてみることにしたものの、衰える体力が保つものか甚だ不安を感じ、気休めの類いかも知れぬが、何か継続的なトレーニングをすることにした。

そこで手軽に出来るジョギングを毎週末欠かさず試みることにし、自宅の周りを走ってみたが、最初は三キロも走ると息が切れてしょうがない。それでも懲りずに続けている内に次第に楽に走れるようになり、ある時思い切って十キロ程のコースを試みてみたら結構走れてしまった。走れる体質になるのは、どこか体が踏ん切りを越える区切りがあるらしく、それを越えると後は飛躍的に体が慣れてくるものである。

そうこうする内に、さそわれて北海道、千歳で行なわれるハーフ・マラソンに参加することになった。あまり恥かしくないスピードで二十キロ余も走り切れるかしらん、と不安だったが、それよりもただ走るだけのために遠くまで出掛けるのが何だか馬鹿らしく思えてためらった挙句、もう一日ひまをとって、ついでに千歳から遠くない羊蹄山に登ることにして、やっとその気になった。

こうして一九八八年七月三日、初めて参加したレースの結果は一時間三六分二九秒という、まあ満足できる記録で終り、足は疲れたがアッという間にゴールへ着いてしまった感じで、翌日の羊蹄山も気分よく登って来た。

針葉樹会の仲間を中心にして、丸の内に勤務する西牟田君の会社のシャワー室を主に根城にして集まり、水曜日の夜、皇居周回のジョギングをしようという、自称「パレス水走会」なる催しがその頃行なわれていた。前述のレース参加以来、ぼくも時々それに加わることにし、その内すっかり常連になってしまった。千歳のレースには、フル・マラソンの部もあり、一緒に出掛けた中島（寛）、金子のご両人はフルを走ったのであるが、ハーフを走ったのならフルも走ってみろよ、と云われ、その気になって準備のために練習量を増やそうという魂胆だったのである。

翌年一月二九日、五十歳になった直後、千葉、館山で行なわれた若潮マラソン大会で初めてフル・マラソンに挑戦、三五キロを越えるあたりから足が上がらず苦労したが、三時間三八分三六秒という記録で走り切ることができた。四二キロはどうも長過ぎる、登山よりきびしく潤いもなく山のトレーニングどころじゃない、一度で沢山だ、というのが直後の率直な気持ちだったが、走ったあとの気分

が爽快だったのも又事実だった。

思い立って約半年、四百キロ位の練習量、しばらく禁煙し食事も心掛けて指導書の用法に従ったりした上での試みであったのだが、しばらく経って足の痛みも消えると、もう少し練習しペース配分をこうすれば、もっと楽に速く走り切れるのではないか、などと興味も湧いて来るのだった。

《走りつづける》

こういう事情をきっかけに以後十年、走るトレーニングは走ること自体が目的となって生活に欠かせぬ行事として続き、一方登山の方もお陰で大して苦労することもなく、変わらず冬山を楽しむことができた。

この十年、つまり一九八九年から九八年は、毎年「ランナーズ・ダイアリー」という雑誌の付録の日記帖に走った距離・場所などの記録を付けてきたが、その集計によれば全走行距離は一万四三〇〇キロ（つまり地球を三分の一周余り）で、年平均一四三〇キロ（JRの路線距離で東京～鹿児島間程度）、日割りにすれば毎日欠かさず三・九キロを走っていたことになる。最初はただ走るという単調なことを続けられるわけはないと思っていたが、結構それには深みといったものもあり、刻苦勉励という感じは丸でなく続き、積み重ねのもたらす意味を実感するところとなった。

一方、その間に主に寒い季節を中心に時折参加してきたマラソン・レースは、十年で計四六回（現在までの通算では四九回）、その内フル・マラソン一七回で、他は三〇キロレース、ハーフ・マラソンなど様々である。年平均四・六回だから、冬のシーズンにはまあ毎月一回どこかへ行って走っていた訳である。これも登山と同じで、一人ではつまらないので暇と趣好の合った仲間を探すのが大変だが、幸い付き合いのよい同好の士にめぐまれ助かった。

日常の走行ペースは、典型的なパターンは週三回、毎回一〇キロ程度を走る。その内一回は前述の「パレス水走会」で、水曜になると心掛けて勤務を切り上げ、たいがい夕刻六時半頃丸の内のビルの地下室に集まり、皇居を二周する。一周約五キロのこのコースは、空気は汚れているが、お濠端の気持ちよい道で、年中様々なランナーの姿が絶えない。われわれは各々マイペースで、まあ大体五〇分内外のスピードで走ったあと、決まって近くの食堂でビールを一杯やり、さっぱりして帰るのである。この他人も熱心にやっている、という雰囲気の中に居ることが、続けて走る気持ちを持ちつづけるのに非常に大きな力となったようだ。

あとは主に週末の二日を使って、千葉の自宅の周囲の海岸や川べりに適当に一〇キロから二〇キロのコースをとって走るのであるが、そのためのたった一、二時間のひまをとるのがなかなか難しく、家族のつきあいやら用事やらで苦労したりしたものの、その内自然に暮らしの中のひとこまとしてはまって来てしまった。

丁度その頃、住んでいた郊外マンションも手狭になってきて買い換えようと考えていたが、思わしいものも見付からず、では発想を変えて田舎に小さな別荘を買い増して週末はそこで過ごせばいいではないか、ということになった。そこで、走る環境も考慮の内に入れて、茂原の丘陵地にある一軒を選んだ。それは、房総の脊梁山地が九十九里浜背後の平野に繋がるところにあって、周りの山道や畦道にいくらも走るコースがとれそうだった。

ぼくにとって、長年走り続けられた秘訣は、水走会と共に、この週末の田舎暮らしにあった。周りをあちこち走り回った揚句、お気に入りの定番コースが二つ定まり、一つは田圃道を通り抜けて七キロ程先にある権現森（武ケ峰という名もある。高さ一七三m）という房総の脊梁山脈上のピークまで往復する山道コース、二つには九十九里浜へ流れ出る一宮

川(中流は豊田川という)の土手道を海に向って走るコースで、海岸までの約二〇キロを、途中のいくつかの橋のどれかを折り返しにしてその日の調子で適当に走行距離を決める。もう一つは、付近の田圃道を通って、自宅の窓から正面に見える丘の周りをぐるっとひと回りして来る一〇キロばかりの農村周回コースである。

四季折々の変化を楽しみながら、マラソン大会の参加日程が近付けば長い距離をとるなどの調整をしたりして、快適な環境で練習を積むことができたが、レースの練習というよりも、通い慣れたふるさとを逍遥する感覚で走るこの日常のジョギングそのものが目的となって、レース参加の方は単なる生活の区切りのような位置付けになって来た。

そもそも登山のためのトレーニングで始めたことであるが、それには正に効果的ではあったけれど、正月や五月の連休、夏休み山行などまとまった山行は別にして、それ以外はむしろ生活のリズムを狂わせる様なところもあって、かえって山へ出掛ける機会は減ってしまったようだ。走りつづけているとどこか足を痛めることが多く、常に何がしか故障をかかえている状態が多い。レース参加予定の直前に足の筋肉を強く痛めたりすると、練習も出来ず具合悪いが、そうしたある時、軽い山行なら痛みも苦にならなくて歩けるのではないかと思い、練習代わりに一人で金峰山を登りに行ったことがあった。こうなると、やっていることが本末転倒だが、やはり走ることは歩くことよりきびしいのである。

《振り返って思う》

時折のマラソンレース参加も又、繰り返す内にそれ自身が目的化する傾向を強め、物珍しさから参加する様な動機から変わって、毎年一定の時期に決まった大会に出て走り、走るリズムを維持することが主眼となった。遠くの人気ある大会に出てみるというより、手近の便利なレースで必ず毎年走って調子を保つのがよい、ということになったのだ。

そうした定番レースは、年毎にいくらか変わるが大体決まっていて、例えば一月に行なわれる多摩川畔の三〇キロレース、館山のフルマラソン、十月の信濃大町三〇キロ、千葉勝浦二〇キロ、十一月のつくばフルマラソン、などであった。中でも、館山マラソンは当初から年中行事の中心となり、九回まで連続参加して来たが、十回目はどうしても都合がつかず途切れてしまった。

走り込む内に徐々に走るスピードは上がるものと思っていたが、五十代の体力ではよっぽど努力すればともかく、むしろ筋肉を維持できればよい、という状況で、フルマラソンの記録は、二回目こそ最初の記録を上回って三時間三〇分を少々切るところまで行ったが、その後は走る度に遅くなって、最近は四時間を切るのが難しくなってきた。総じて、一キロ五分台のペースが維持できれば、まあ調子よいというレベルで、所詮もって生まれた筋力や酸素摂取能力はその程度を越えるものではなかった、ということであろう。寄る年波で、走り始めて十年の間に、普通に走るスピードはざっと一、二割落ちたようで、それは基礎体力の反映であると考えれば、登山能力もそれに準じているに違いなく、年甲斐もなくと云われない様に、山では自重しなくてはと思っている。

振り返って思うに、十年走った体験は、それがトレーニングや健康維持に効用があったということではあるが、そうした何かのための手段というよりも、大げさかも知れないが五十代の十年の生き様として、熱中したこと自体が自分の気持ちとしては意味深かった、と云ってよい。

その間、それなりに頭や口先を使って、いわば社会生活を続けていたのではあるが、それと同じ程度の重みで、足や内臓も走ることで使役し、五体を満遍なく稼動させて人生の

一時期を過ごしたことが思ったより良かったのであり、精神的バランスがどことなく安定して心の満足度を高めてくれたような気がする。

そういう、気持ちの内で打ち込む生活の中の第二の対象としては、四十代では時折出掛ける山登りが、体力を推し量りながらも意欲的に登る山を物色したりして、いうなれば人生における精神の昂揚行為として位置付けられていたと思うのであるが、十年も経つと次第に山で厳しさに対面するつらさに負けるのであろう、登り方は自然に穏やかな趣向に傾いて、変わって気持ちを燃やすものは走ることでよくなってしまった、ということだろう。

さて、こうして五十代の十年、走ることに精を出して来たあと、六十代に突入した今年も同じ様に走る習慣をつづけており、年初には四九回目のレース、多摩川三〇キロをどうやら走り切って、次の五〇回目の記念レースをどこにしようか、と考えているところではあるが、どことなく様子は以前とは違って、気がのらない。やはり、フルマラソンを走るための気長に体調を整える根気が続かない所が最も変わった要因だろう。いろんな意味で、人生そのものも変わり目に来ているらしいが、さて、それではどうするのか、今の所どういう当てもない。しかし、走りながら考えている内に、何か次の納まり所も自然に決まってくるのではないかと思っている。

◇◇◇

早稲田大学岳友会「やまごやの燈」（1999年5月12日発行）より

天地ある限り　いつ迄も　～　中島寛君の思出

城山　邦紀

【編集部から】

城山氏は、中島氏の浦和高校時代の親友で、読売新聞社松本支局で山岳記者をしていた時には、中島氏がよく山の帰りに寄ってくれたそうです。氏の原文は大変長いものなので、鹿島山荘の土蔵に保存してある早大岳友会の「登高記念」に記された一橋大山岳部員の署名と山行記録に関する部分だけを抜粋して掲載いたしますのでご寛恕ください。

城山氏は平成10年9月、これらの記録を写真に撮って、10月2日、中島さんが入院されている東京衛生病院へ持参されました。

（前略）

前触れなしに訪れたため、ベッドのかたわらの椅子にすわっていた夫人が、そっと入り口の所へ来て、ささやくような声で「今、とても具合が悪いので……」と、おっしゃった。私も小声で、「この写真だけ渡して下さい」と言って帰ろうとした。

すると、病室の中から「いいよう……」と、消え入るようなか細い中島君の声がした。遠慮して帰ろうとすると、夫人が「どうぞ、会ってやって下さい」と押しとどめるので、カーテンをあけ、ベッドのそばへ行った。

中島君は、ランニングパンツは同じだったが、上半身、裸だった。「今にも走り出しそうな格好だなあ」と、私は11日前と同じことを言った。

私は黙って、写真を差し出した。「昭和参拾六年　登高記念　正月吉日」の表紙に続いて、4頁にわたり、次のように筆で書いてある。

昭和三十五年十二月二十六日　鹿島槍冬合宿　一橋大学一橋山岳部

CL中川滋夫　中島寛　小林進二　三股宏
倉知敬　大健二郎　三井博　遠藤晶士　臼井
弘　多田伸治　後閑勉六　蛭川隆夫　伊藤重
道　石弘光

十二月十三日より二十五日まで鹿島槍東面に冬期合宿を行う　前半は天狗尾根、東尾根、赤岩尾根の三パーティに分かれた分散合宿、全員南峰・北峰の登頂に成功、後半は高千穂平に集結、再度南峰、爺岳に全員登頂、爺岳バットレス主稜（仮称）の登攀を行なった。好天に恵まれて至極快調なペースで終始した。

高千穂平よりの爺岳バットレス（ルート図が1頁分描いてある）

じっと見ていた中島君は「これはオレの字だ。（仮称と書いた爺岳バットレス主稜は）初登攀だったんだ」と言った。言葉ははっきりしていた。顔に赤味がさし、目に光がこもった。三十七年前の若き中島君がいた。

入山したのは、一橋山岳部が昭和35年12月13日から26日、早大岳友会が12月22日から翌36年1月3日。岳友会は天狗尾根、東尾根をアタックしたが、天狗尾根で遭難。その時の記録が、一橋山岳部の記録の数頁あとにある。「なあんだ、君と一緒に鹿島槍にいたのか」と、不思議な縁を喜んでくれた。

彼は写真を夫人に渡した。夫人の弟の中村慎一郎さんが二年部員の時、鹿島槍天狗尾根で遭難死した際、中島君は駆けつけて献身的な活動で世話をした。それが縁で昭子さんと結ばれただけに、中島夫妻にとって、鹿島槍

は忘れられない山なのだ。

中島君は5月に結婚すると、7月下旬、二人で上高地に遊んだ帰途、松本へ寄った。昭子夫人は半そで姿。私はまぶしい新婚の二人を、いつも肩に下げている取材用のキヤノンで撮った。8月、中島君はエベレストへ遠征した。

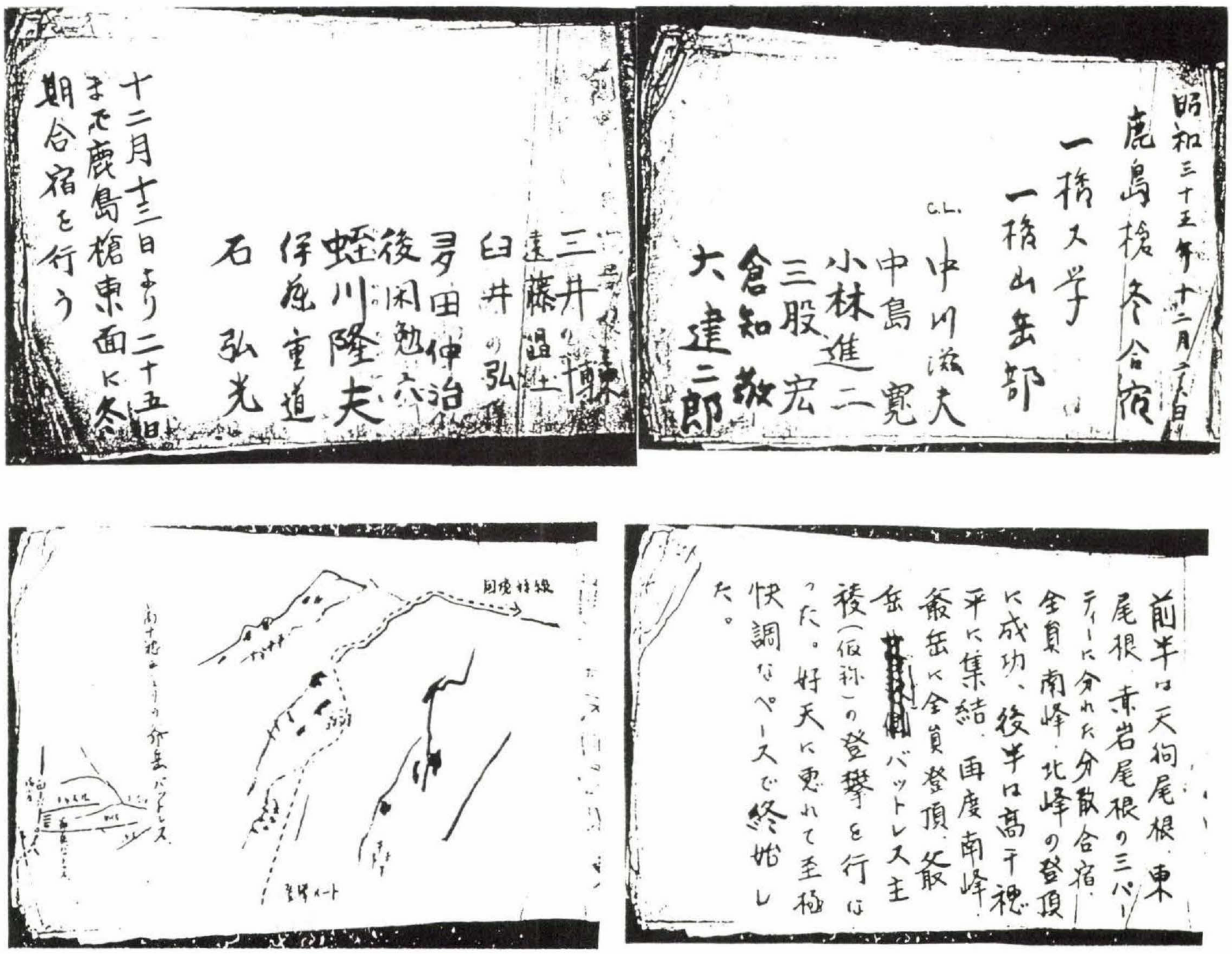
……（略）……

夫人が黙ってシャツを差し出すと、酸素吸入器をはずして、頭からスッポリとかぶって着た。固辞するのに、廊下まで出て見送ってくれた。今度は、私が右手を差し出した。握手をする中島君の力は、ハッとする程、弱かった。

「また、来ます」と言う私に、中島夫妻は、深く頭を下げたままだった。中島君の目を見ようと思ったが、夫妻は頭を上げなかった。

それから四日後の10月6日、中島君は逝った。中島君は勁（つよ）かった。死を間近にして、どうしたらあれほど人に優しく、己に厳しくなれるのだろう。

（後略）



会務報告

針葉樹総会より

6月24日　如水会館　武蔵の間にて

●役員改選

新役員には次の方々が選任されました。

会長　石原　脩（留任）

副会長　高崎治郎（留任）

▽評議員

中島寛氏の逝去により欠員が生じたため、西牟田伸一氏が新任されました。また、評議会議長は、小林茂氏が退任し、新たに石井左右平氏が就任いたしました。

そのほか次の評議員の方々が留任となりました。

松下順吉、　小林茂雄、　樋口　洪、
石井左右平、　山本健一郎、　中村　保、
市畑　進、　高橋信成、　小野　肇、
中村雅明、　井草長雄、　藤本敏行、
中西　茂、　白石章治

▽幹事

代表幹事　佐藤活朗（留任）
総務幹事　古田　茂（留任）
会計幹事　田形祐樹（留任）
会報幹事　佐薙　恭（新任）
井草長雄（新任）
大谷公重（新任）
＊中村保、倉知敬、遠藤晶士、外池武司の各氏退任
山行幹事　近藤　泰（留任）
丸山則二（留任）
学生幹事　井上裕之（留任）
古瀬泰介（留任）
保険幹事　岡部晃和（留任）

部室再建幹事・西牟田伸一氏はプロジェクト終了にともない退任。

▽監事

渡辺嘉佑（留任）
中村雅明（留任）

▽新入会員

西井　薫（住友生命勤務）
松田　智（日本ユニシス勤務）

●活動報告

▽懇親山行

98年10月31日～11月1日
南八ヶ岳西面
参加者＝山崎、高崎、丸山、西牟田、佐藤（活）、佐藤（周）、近藤、学生＝久田、佐藤　計9名

茅野から入山、オーレン小屋に宿泊し、硫

黄岳、天狗岳、横岳などを分散登山して、三々五々帰京。

▽**花見の宴**　4月3日

新部室の完成を記念して、部室前で盛大な花見の宴が開かれ、記念植樹がおこなわれました。

▽**懇親山行計画**

99年秋と二〇〇〇年春のスキー山行を予定。具体的プランは追って連絡いたします。

●山岳部活動報告

▽**98年度活動内容**

5月　新人歓迎山行／北アルプス・徳本峠

6月　雪上訓練／北アルプス・涸沢

文部省登山研修所山岳遭難技術研修会／立山・雑穀谷

日本山岳会学生部小川山集会／小川山

7月　岩登り合宿／三ツ峠

8月　夏合宿／北アルプス・剱沢～親不知

11月　冬・春合宿偵察

12月　富士山雪上訓練／富士山

冬合宿／蓮華岳東尾根～針ノ木岳

2月　プレ春合宿／八ヶ岳

3月　春合宿／笠ケ岳

▽**現役部員**

宗像充（5年）、田中真之（4年、事故の

一般会計平成10年度決算
（平成10年6月1日～平成11年5月31日）

	支出			収入	
項目	金額	（予算額）	項目	金額	（予算額）
会報発行費	605,585	300,000	納入会費	751,000	800,000
通信連絡費	159,890	70,000	雑収入	0	2,000
総務諸雑費	56,807	60,000	前年度繰越	-81,307	-81,307
学生保険補助	40,000	48,000	山岳部特別補助	100,000	100,000
山岳部補助	240,000	240,000	中島寛後援会（会報補助	157,500	0
名簿発行費	0	100,000	借入金	175,089	0
次年度繰越	0	2,693			
合計	1,102,282	820,693	合計	1,102,282	820,693

（注）　借入金は、会計幹事の立て替え

一般会計平成11年度予算
（平成10年6月1日～平成11年5月31日）

	支出		収入
項目	金額	項目	金額
会報発行費	300,000	納入会費	775,000
通信連絡費	100,000	雑収入	2,000
総務諸雑費	70,000	特別繰入（遭対費より	148,805
学生保険補助	32,000	前年度繰越	0
山岳部補助	140,000		
名簿発行費	100,000		
借入金返済	175,089		
次年度繰越	8,716		
合計	925,805	合計	925,805

（注）　特別繰入は、会報発行費が諸般の事情から高額となったため、遭難対策費より補填する。

ため今年度の活動は休止)、久田英一郎(2年・リーダー)、蔦谷高志(2年・事務のみ)、山田秀明(1年)

▽北穂高沢事故報告

5月30日、雪上訓練合宿の最終日、北穂高沢を下山中に、4年の田中真之君が落石を受け、右手前腕部を骨折し、ヘリコプターで松本の日赤病院に収容された。

宗像リーダー以下4人で北穂高岳を登頂後、北穂高沢の雪渓を下っている最中、南稜から落ちて来たラグビーボール大の石がグリセードで先頭を下っていた田中君に当たった。事故発生時刻8時40分。

＊この件については評議員会でも報告がされ、席上、「状況判断に甘さ、気の緩みがあったのではないか」との厳しい指摘もあった。

■お知らせ

中島寛さんの遺作『一期一会の山・人・本』を針葉樹会員のために20部だけ残しておいてくださっているそうです。本をご希望の方は中島未亡人へハガキでお申し込みください(先着順)。

遭難対策基金平成10年度決算

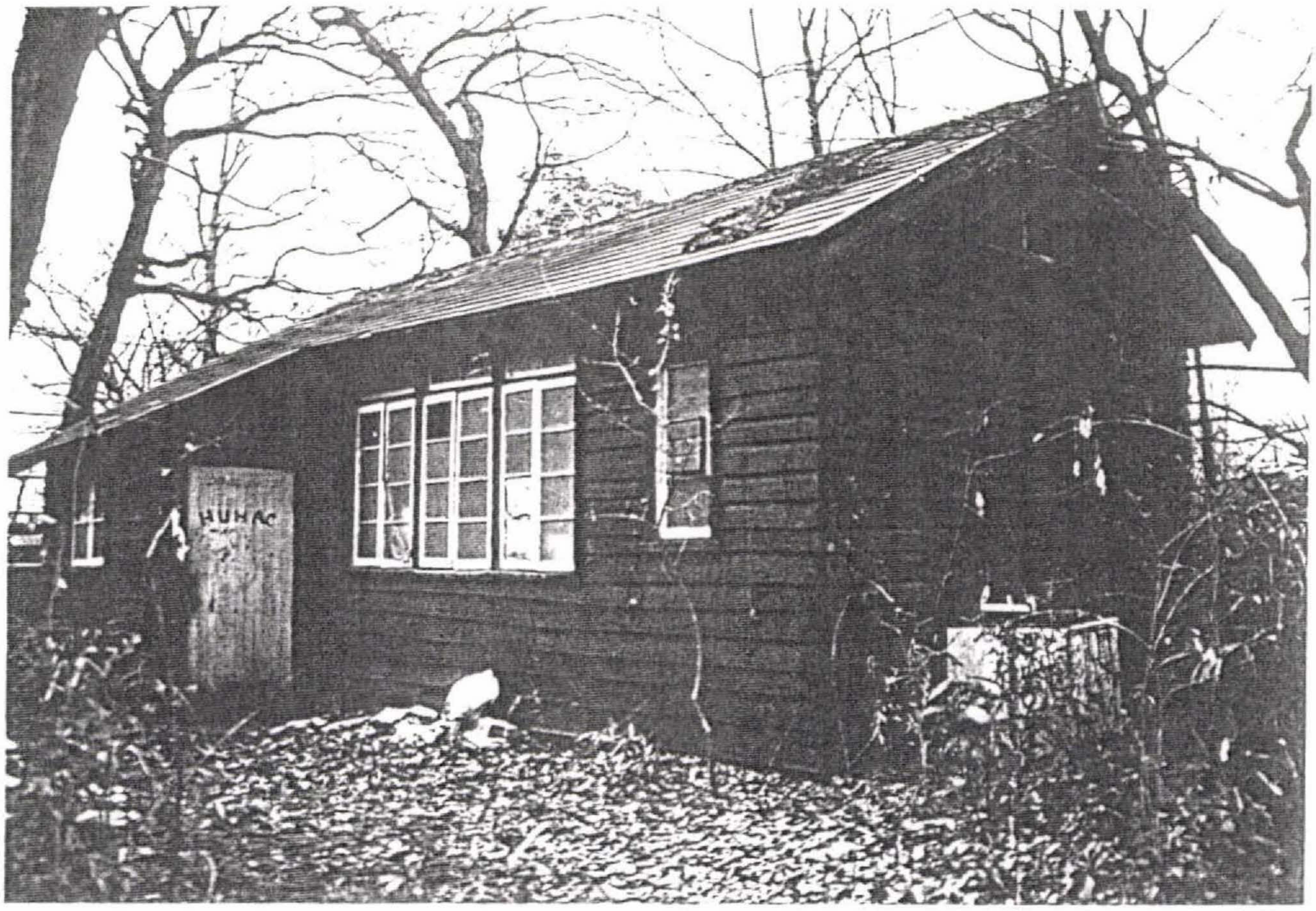
(平成10年6月1日～平成11年5月31日)

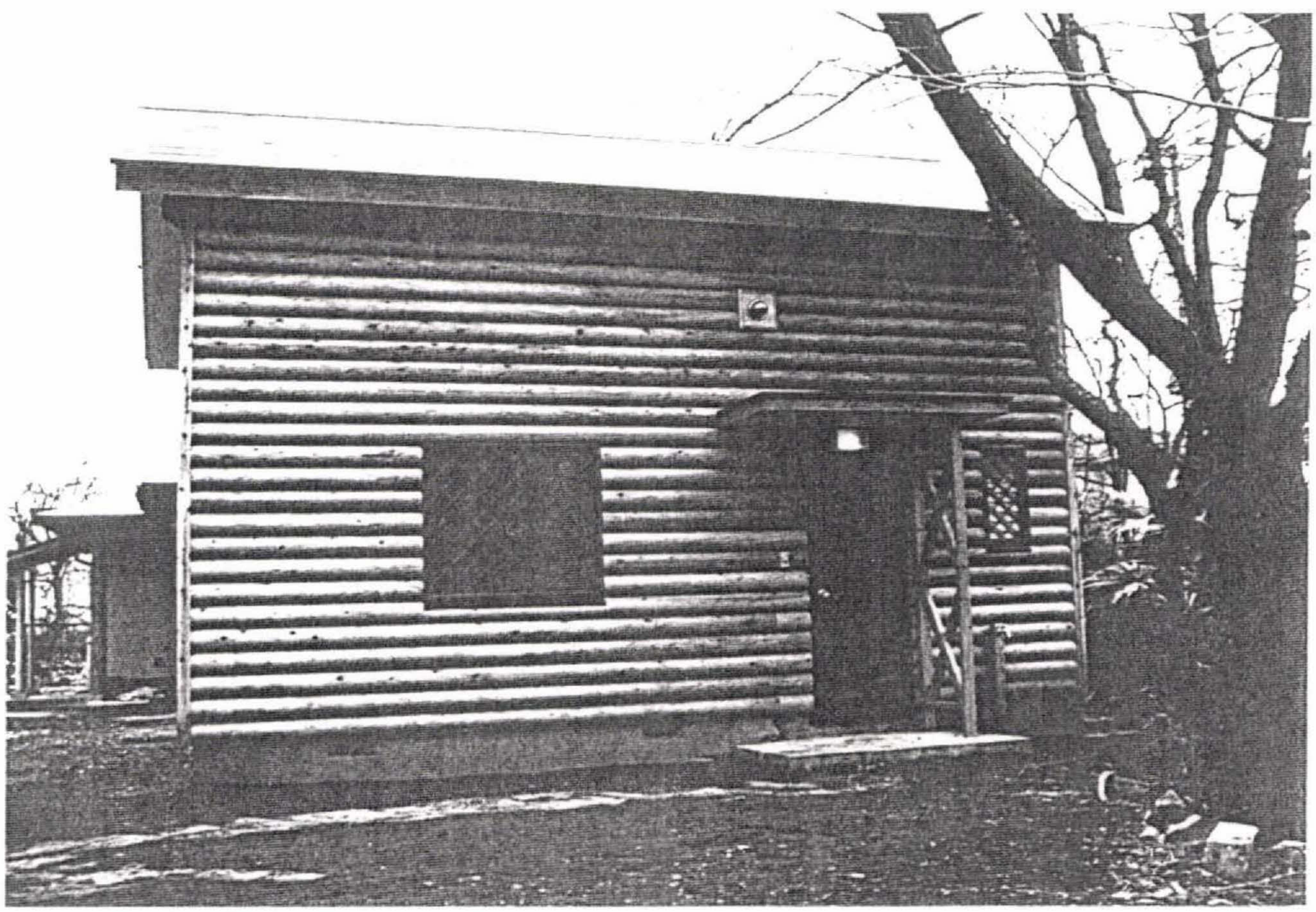
項目	支出 金額	(予算)	項目	収入 金額	(予算)
学生保険補助	40,000	48,000	前年度基金有高	6,406,783	6,406,783
山岳部特別補助(ビーコン購入)	100,000	100,000	内遭対基金	5,406,783	5,406,783
日本山岳会ブータン遠征寄付	100,000		内遠征基金	1,000,000	1,000,000
遭難対策費(北穂関連)	41,898				
部室再建基金へ払出	605,402				
雑損(振込手数料)	1,470				
基金有高	5,560,678	6,338,783			
内遭対基金	4,660,678	5,338,783	学生保険補助	40,000	48,000
内遠征基金	900,000	1,000,000	利息等	2,665	32,000
計	6,449,448	6,486,783	計	6,449,448	6,486,783

遭難対策基金平成11年度予算

項目	支出 金額		項目	収入 金額	
学生保険補助	32,000		前年度基金有高	5,560,678	
遭難対策費(北穂関連追加分)	50,000		内遭対基金	4,660,678	
一般会計補助(会報発行費)	148,805		内遠征基金	900,000	
部室整備基金へ払出	500,000				
基金有高	4,872,873				
内遭対基金	3,972,873		学生保険補助	32,000	
内遠征基金	900,000		利息等	11,000	
計	5,603,678		計	5,603,678	

〔決算〕
日本山岳会ブータン遠征寄付(100,000円)は遠征基金から支出
決算の利息が予算比減少しているのは、当初見込みが過大なこと、部室再建基金への払出時に割引引債を中途換金したため
〔予算〕
北穂関連追加分は、北穂高小屋渡辺氏等への救援謝礼他
予算の利息は0.2%で計上


HUHAC



花見の宴に集まった懐かしい顔、顔……（4 月 3 日新部室前で）

編集後記

●前任者の中村保兄からバトンタッチを受け会報担当となりました。私（昭31卒）のほか、井草君（昭48）、大谷（平10）が仲間です。この三人の卒業年次の隔たりは四〇年強です。三人で会報を幅広い会員層にとって魅力あるものにすべく努力するつもりです。よろしくご指導とご協力をお願いします。

さて新部室／旧部室に関連してですが、募金額が会長の夢にも思わなかったレベルにまで達したこと、完成を祝う花見の宴への出席者が総会や懇親山行とはくらべものにならぬ多人数であったこと、これは何故だったのでしょうか。今回山崎先輩をはじめとして諸先輩が戦争末期から戦後数年の暗黒時代ともいえる時代について書かれていますが、そこから読み取れることは、その方達にとって旧部室は山岳部生活の、すなわち遠い青春時代の言わば原点ともいうべき存在だったことです。もう少し後の明るくなった時代の者にとっても多少の差はあれ同様なのでしょう。それが失われ新しいものに置き換わるということでのあの盛り上がりとなったのでしょう。そうすると次の問題は新しい部室が今後、誰に対して、どんな役割を果たしていくのか、我々OBは如何にかかわり合っていくべきなのかということでしょうか。（佐薙）

●70年代初頭、旧部室で印象に残っているのは、ガラス箱に入った古色蒼然としたどくろと熊の毛皮の敷物。どくろは、持ち込んだ張本人の甘利さんがその後アンデスに帰してあげました。熊の毛皮は、由来は知りませんが古い物らしく、その上に座ったり寝たりしていると痒くなるので、虫がわいたんじゃないかといって私たちが燃やしてしまいましたスイマセン。

さて会報については、山に登っていない人も読みたくなる内容を、という前任者の編集方針を踏襲しますので、身辺雑記、近況報告など形は問いませんので皆さんの消息がわかるような文を折りにふれ、思いついた時でけっこうですから編集幹事までお送りください。もちろん山の原稿もどしどしお寄せください。

今号の写真で、旧部室と太田先生の写真は横山さんが提供してくださったものです。同封した新旧部室の写真コピーは、部室完成御礼の挨拶状とともに入れる予定で石原会長がせっかく作ってくださったのを私が入れ忘れてしまったものですスイマセン。また23ページの花見の宴の記念写真は、ご希望の方には焼き増しして実費でお分けしますので、井草までファックスかはがき、電子メールで11月末日までに注文してください。（井草）